

牧之原市の小さな図書館の挑戦と遺贈寄付



新しい図書館（図書交流館いこっと）が入った複合施設 MilkyWay Square

私の母は 1931 年生まれの 90 歳でしたが、今年 4 月 6 日に老衰で亡くなりました。

第二次世界大戦をはさんで女学校へ通い、卒業して実家がやっていた郵便局に勤め、電話交換手もやっていたそうです。23 歳で、公務員であった父のところに嫁いできて、2 男 1 女を生んで育て、その間ずっと家でお茶や野菜の栽培をやっていました。

私は長兄として、近くで母をずっと見てきました。父が 53 歳と早く亡くなり、母は 40 年間一人で農業に精を出す一方で、趣味とお友達をたくさん持っていました。中でも「野の花会」という地域の読書会に所属し、本を読んで感想文を書いたりメンバーで旅行に行ったりと、とにかく本が大好きでした。

そんな母が晩年、住んでいた牧之原市に新しい図書館ができることを聞いて「完成したら図書館に行ってみたい。本も寄付したい」と言っていました。

その図書交流館「いこっと」は、母の葬儀から10日後の4月19日にオープンをしました。行くことも寄付することもかなわなかったのですが、母の希望であった「図書館に本を贈りたい！」という願いは、「遺贈寄付」という形で実現し、すでに図書館にその贈られた本が並べられているはずです。



「図書館に本を贈りたい！」という母の遺志は叶えられました

小さな図書館しかなかった牧之原市ですが、市民活動として、読み聞かせや図書館ボランティア活動が盛んで、その皆さんからは永年図書館建設の要望が出ていました。

私が市長時代に、市役所など公共施設の空きスペースを利用して図書館ができないか検討したり、並行して民間施設の空き利用をも検討しましたが実現できませんでした。

現在の杉本市長になった時、施設オーナー側から提案をいただき、ショッピングセンター内の空き店舗を有効活用して、民間との複合施設としてリニューアルを行い、図書館を建設するとの結論になりました。

そして、図書館を中心市街地の賑わい拠点と位置付け、本をツールとした、人と情報の交流を目的とした図書館とし、名称をその意味にふさわしい「図書交流館」としました。

蔵書数4万冊、席数80席という小さな図書館は、国から地方創生交付金の支援を受けて、今年の1月にリニューアル完成しました。



入口のない広々としたエントランス

完成から開館まで、わずかな時間でしたが、多くの市民ボランティアの皆さんと、中学生や高校生の皆さんが、自ら立ち上がり、本のクリーニングや引越し、配架など、開館準備をサポートしてくれたそうです。このことが今後「市民が育てる図書交流館」の大きな力になることでしょう。

この施設の特徴は、図書館と民間施設と境目のない(壁が無い)施設構造であり、だれもが気軽に訪れることができます。さらに、館内には音楽が流れ、交流・談話エリアでは、会話や飲み物の持込みもできます。お母さんが読み聞かせできるスペースを設けた児童エリア、静かな空間を確保した学習室などを備え、ホテルラウンジのように、誰もが居心地の良さを感じられる造りとなっています。



むき出しのスケルトン構造は図書館を感じさせない斬新なデザインです

さらに図書を通じて知るというだけでなく、人と会う、自分の時間を楽しむなど、多くの人に居場所として利用してもらうことを目的としています。そのため、図書交流館が入っている施設内には、喫茶店、ボルダリング、レンタルキッチンやレンタルバイクなどが入っています。また広いレンタルスペースでは、各種イベントなどを行うことができるようになっています。

この他、多くの方(40社)に週刊誌や月刊誌の雑誌スポンサーとして協力していただいています。



子どもたちが本に親しめるコーナー

4月17日図書交流館オープン以来、年間目標来館者数5万人(旧相良図書館1万2千人)に対して1ヶ月で2万5千人と好調な滑り出しです。

特色のある施設で、従来の小さな図書館に比べればぐっと入りやすく使いやすくなったとはいえ、周辺の市町の図書館の蔵書数に比較すると4万冊は少なすぎます。とは言え、財源をおいそれと確保できるめどはありません。そこで、私は図書館の皆さんに、今回母が行った「遺贈寄付」の活用を提案しました。

寄付というと日本人はお金持ちがすることと思っています。でも私たちはお金持ちでなくて少額ですが、誰もが身近でたくさんの寄付をしています。赤い羽根募金とか年末助け合いとか、さらには地震や津波などの全国的な災害では、多くの善意の寄付が集まります。特に、先の東日本大震災では、海外を含めて莫大な寄付が集まりました。また、日本赤十字とか日本財団やユニセフなど大きな社会貢献団体は、大掛かりな宣伝を行いながら、事業の財源となる寄付を集めています。ちょっと違うかもしれませんが、お寺や神社でも、私たちはお願い事しながらお賽銭を投げ入れています。



雑誌は年間企業スポンサーの提供

最近クラウドファンディングが人気です。公園にチューリップを植えるお金が足りないので 100 万円集めましょう。出していただいた方には、入場券をプレゼントしますよ！寄付者の芳名を出しますよ！そうしたら、その熱意に賛同した皆さんから、5 千円、1 万円、3 万円と少額の積み重ねですが、トータルで予想を大幅に超える寄付が集まりました。大きな額でなくても良い！と考えると、その公園が好きで、チューリップが好きで、そのシーンを（みんなが喜んでいる）共有できる人達が出してくれるのです。

図書の寄付も同じ考えですが、従来からの利用者は「図書館は行政がやっていて、私たちの出した税金で蔵書を購入するのは当たり前」と思っています。だからいきなり「寄付ください！」と言っても怪訝な思いを持つ方が多いはず。そんな時に「私の寄付で、私の好きな図書が購入されて読んでもらえたらうれしいな！」と考えてみたらどうでしょうか。それも、私の老後について心配でなくなった、つまり私が亡くなった後で、残った遺産の一部が蔵書購入になるとしたらどうでしょうか。

いつも通いなれた図書館の館長さんに、仲良しの司書さんに、そんな思いを伝

えて、それがいつ実行に移されるかわかりませんが、温かい気持ちが息づいていくことでしょう。

遺贈寄付とは、亡くなって最後に財産が残った時に、その中の一部を、小額からでも寄付することができる方法です。自分の想いを、未来の社会や子孫に託せる、誰もができる新しい社会貢献です。

高齢世代が保有する資産は、若年層の約 8 倍とされています。長寿化が進み老後に対する不安から、社会貢献したくても自由にお金を使うことができませんが、90 歳の親から 70 歳の息子では、今後ますます資産の循環が高齢者間の身になってしまい、動かない金融資産、若者の貧困につながります。

今回、図書館への「遺贈寄付」を経験して、わずかな金額でも母は「自分のやりたかったこと」「子や孫に伝えたかったこと」として残せたと思います。それは子や孫にとっても誇りになります。こんな思いやり「遺贈寄付」の考えが広まっていくといいなと思っています。

もっとも私は「死んでから」ではいつになるかわかりませんでしたので、雑誌の年間スポンサーになりました。図書交流館は、富士山静岡空港から 20 分、コロナが治まりましたら是非おいでください！お待ちしております！

文：西原茂樹，MIJBC 理事長